

第 1 回～第 3 回明日香村小委員会における各委員からの指摘事項等
 (資料 5 - 1 「明日香村小委員会報告 (案)」に沿った整理)

※文末[1]は第 1 回、[2]は第 2 回、[3]は第 3 回の指摘事項等を示す

1. これまでの取組みの評価に関すること

- ① 5 年前と比べて整備等が驚くほど目に見える形で進んでおり、スマートフォンアプリにより、非常に見やすく分かりやすい形が作られるなど、徐々に良い状況が生まれつつある。[1]
- ② 東京で行われたキトラ古墳壁画展は大変な盛況ぶりであり、国内外から多くの関心が寄せられている。[1]
- ③ 15 年前は 7～8 軒だった飲食店が 40 軒ほどに増えた。レベルがかなり高く、リピーター客がついていて、いつも混み合っている店がある。[1]
- ④ 人口減少の問題など、村の活性化の速度が遅い。子供の教育支援策が奏功し、子育て世代が戻ってきているが、2035 年の人口推計では、14 歳までの人口が現在から 3 分の 1 くらいに減る。整備が進み条件が恵まれているにも関わらず、人口が減る原因が何なのか考えないといけない。[1]
- ⑤ 音声案内システム機能を搭載し飛鳥地方を周遊できる超小型モビリティのレンタルサービスを 10 月より開始した。[3]

2. 当面取り組むべき施策のあり方に関すること

1) 歴史展示の推進に関すること

- ① 日本だけでなく世界の財産であることを、より広く理解してもらうためには遺跡の一部を復元してスケール感などが分かるようにするとともに、ビジュアルで分かりやすく説明し、さらに村民が十分に誇りと認識を持たないといけない。[1]

2) 歴史的風土の維持・向上に関すること

- ① 国営公園から出た途端に隣にある駐車場のひどい光景が目に入る。公園の敷地外であっても国と村が連携して景観を守ってほしい。[1]
- ② 電線類の地中化をもっと進められたらと思っている。[3]
- ③ 農地や林地を村民だけで維持管理するのは困難なので、NPO など村外の人をもう少し積極的に活用できる仕組みを何とかできないか。[3]
- ④ 大字景観計画が普及して意識が高まり、村民のアイデンティティや誇りを景観づくりコンテストのような具体的な施策に結び付けられると非常に良い。[3]

3) 明日香を支える「農」の維持・再生に関すること

- ① 農地の維持管理への支援制度などを積極的に活用する方向性が示されると、農業の担い手確保にもつながるのではないか。[3]
- ② 地域振興公社の積極的な農業経営に加え、企業の農業への参画あるいは集落営農の企業化を推進し、農業労働者として担い手を確保することなども検討の必要があるのではないか。[3]

4) 観光・交流の振興に関すること

- ①レンタサイクルは自由に乗り捨てができて、情報を得ながら周れるシステムにはなっていない。また、自転車道と歩道が十分に整備されていないので、非常に危険な場面があり、楽しく巡るような仕掛けになっていない。[1]
- ②MICHIMO については、レンタサイクルと同様の当面の取組が必要である。また、ポケットパークやトイレなどと合わせた施設整備なども必要である。[3]
- ③中心部の周遊は4 kmほどで距離的には良いが、途中にステーションがないので、暑い日は日陰がなく、雨の日は雨宿りの場所が十分とは言えない。[1]
- ④住民になったような気持ちで、暮らすように旅をするための設えやもてなしの対応が不十分である。[1]
- ⑤民家の外観は保ちながら、内部を改修した一棟貸しの宿泊施設が村内にも複数あるが、明日香に相応しい古民家再生の具体的なイメージを共有した上で取組みを進めるべき。[3]
- ⑥橿原市や桜井市などに宿泊した観光客に循環バスで来てもらうなど、隣接都市と連携した観光の工夫を行うべき。[3]
- ⑦来訪者数が低迷する中で、外国人旅行者に多言語化したパンフレットを配布するなど、国際的な情報発信をより強化すべき。[3]

5) 住みたくなる村づくりに関すること

- ①小中学生に対する地域学が誇りを育て、観光客に対してガイド経験を積むことで人間関係調整能力を養っている。また万葉集や明日香に関する歴史を英語で説明できるようにになれば、様々な場所で外交官として活動することができる。そうして将来的には村に帰ってきてもらうという長期的な視点がある。[1]
- ②明日香に関係のある事業所のサテライトオフィスを誘致する取組みを近いうちに始める予定である。[3]

3. 将来的な取組みのあり方に向けた今後の議論の方向性に関すること

1) 明日香村の価値の捉え方に関すること

- ①明日香村の価値を様々な観点から絶えず検証する機会を持ち、常に高い次元で国際的な観点から捉えていくことが大切。[2]
- ②四季と共生する生活と歴史資産が共存していることに価値がある。そこに世界との交流の文化を加味して主張していかないといけない。[1]
- ③考古や歴史の分野だけでなく、万葉集の世界を上手に取り込まないといけない。詩を詠むことが心の支えとなり、それをずっと残していることは日本の特徴であり、感性的なものを風土と結びつけ、具体的な場所とつなぎ合わせることで、いろいろなことが説明できるのではないか。[2]
- ④万葉集が世界的にみて素晴らしいのは、身分や性別に関係なく誰もが詩を詠めたという文化水準の高さや平等意識の高さ、それを今に残し続けているすごさにある。

日本人が根本に持っている民主主義的な意識が表されているとも考えられ、日本人として胸を張れる文化資産としてもっと強調すべきではないか。[2]

2) 明日香村の歴史的風土保存のための枠組みに関すること

- ①これまでの土地利用規制に対する支援という考え方ではなく、規制があったからこそ価値を生み、それが実感できる時代に来ているという認識を持つべき。[2]
- ②欧米で買取請求権がなくても規制を当たり前に行うように、地域の価値が高まることをありがたいと思える方向に持っていくべきではないか。[2]
- ③明日香村は隣の高取町と比べて実勢地価が相当高いが、買入制度が地価を下支えしている一方で、土地の需要が大きいという一面もある。[2]
- ④土地利用規制については、大字景観計画や都市計画法第 34 条 11 号などで地区に合わせた調整を行うことで、価値を高めることにつながるのではないか。[2]
- ⑤昨今の住宅事情を背景に、土地利用規制による建築費用の負担増が村外への転出に影響しているという現実を忘れてはならない。[2]

3) 地域住民及び国民の理解協力・積極的な関与に関すること

- ①村民が村の保全や発展に対して誇りを持つことは非常に重要。若者の村づくりへの住民参加が誇りを醸成する段階まで行き着いていないのではないか。[1]
- ②村民は自分の集落に対して根強いアイデンティティを持っているため、大字ごとの世界を創ることから積み重ねることで賛同を得られる。[2]
- ③明日香村民のこれまでの取組みや、それに対する課題を基にした上で、行政からの手助けをするという内容でなければ、村民のやる気が感じられないものになってしまう。[2]
- ④交付金の 4 分の 1 は大字の活動を支えているが、これまで維持されてきた地域の活動は明日香法をはじめとする仕組みの成果である。[2]

4) 歴史的文化的遺産の保存と活用に関すること

- ①都塚古墳などの発掘成果が出てきており、また、牽牛子塚古墳などの整備を推進していきたいと考えている。[3]

5) 歴史的風土にふさわしい景観の形成に関すること

- ①民有林の荒廃が進み自然環境面からの取組みが必要とされる中で、林地の 9 割以上を占める針葉樹林は原風景とは異なり、土砂災害の危険性も孕んでいることから、里山周辺から風土に合った広葉樹に戻す方向で取組むべき。[3]
- ②林地の維持管理については、課題として解決策を探っていくべきである。[3]
- ③空き家の有効活用については、所有者の維持管理の責務や景観への影響を考慮するなど踏み込んだ内容や、租税措置などを検討するなどにより、1 つのモデルを提示することになるのではないか。[3]

6) 地域産業振興による地域活力の向上に関すること

- ①遠い、変わらない、見るもの・買うもの・食べるものがない、夏と冬は厳しいというマイナスキャンペーンを払拭しないといけない。また、周辺市町村と広域的な観

光システムを考えていかなければならない。[1]

- ②奈良や飛鳥のものは東京で大変な人気がある。しかし、それが来訪に結び付いていないのではないか。あるいはもっと大勢に知ってもらう作業が足りないのではないか。遠方の人たちが関わるができる仕組みがあるといい。[1]
- ③万葉集に入っている二上山や飛鳥川などの地名をもとに、今の風景と結びつけて物語を感じることで理解を深め、犬養万葉記念館や万葉文化館、歌碑を巡るツアーなど観光を通じて文化を再興できるといい。[2]
- ④万葉集の本質的な価値を多くの人に知ってもらうために、学校教育で扱うだけでなく、海外にも訳してアピールできるといい。万葉集とゆかりのある地域との連携や、「私からあなたへの万葉集」という現代語で普通の生活のありがたさを表現する取り組みも主張していく必要がある。[2]
- ⑤今の観光のあり方とは、素晴らしい環境の中で自分が主役になり演じる行為にある。そのためには素晴らしい環境づくりと多様な魅力が必要であるが、明日香村の集落には山の中から平野まであり、とても魅力がある。[2]
- ⑥かめバスには乗ってみたいくなるデザインや、特徴的なガイドなどの仕掛けがほしい。それに加えてバーチャル体験のような深い観光につながる仕掛けがあると、明日香の観光がもう少しよくなる。[1]
- ⑦観光に対して庁内体制を整えつつ、外部の専門家との連携を図りながら取り組みを強化していくことが大事。[1]
- ⑧観光客が利用する既存の施設は運営主体も異なり、全体を包括する情報拠点にはなっていないため、ワンストップで情報提供などの対応ができ、観光客が立ち寄れる拠点施設の検討を始めないといけない。[3]

7) 歴史的風土を支える担い手の育成と確保に関すること

- ①飛鳥に都があったという価値を認識し、農業や観光だけではないライフスタイルを上手く表現し、選ばれた人に住んでもらうという観点で住みたくなるビジョンを戦略的につくるのが、安売りしない明日香として大事ではないか。[2]
- ②改修された京町家が高価格でも若い人から人気があるように、明日香村の新しいライフスタイルに合った住宅のあり方や景観のあり方について検討することが必要ではないか。[2]
- ③観光と農業だけでなく新しいターゲットや人を入れることで、IターンやUターンを呼び込める。そのとき、新しく住む人が集落のコミュニティに最初は属さなくても暮らすことができるといい。[1]
- ④若者が転出するのは、将来に対する展望ができないからではないか。若者が明日香村で生活する基盤をどう作るかが課題。外部からの転入や村外者の活動参加も1つだが、地元で育った人が住み続けてもらうのが一番である。[1]
- ⑤総合計画でも位置付けられている産業集積ゾーンの活用に向けて、産業集積あるいは連携の取組みを行うべきである。[3]

- ⑥村民が住み続けたい村と、外の人に移り住みたい村は観点が違うため、それぞれの考えの整合を取り、しっかりと対策を講じることが必要である。[2]
- ⑦集落の人間関係が濃密なために苦勞を感じて出ていく人が実際にいる。転出を止め、30～40代で帰ってくる仕組みを教育や医療、雇用の場などで作っていきけるよう、定住や地域活性に関する情報提供や支援が必要である。[2]
- ⑧明日香村を守ってきた人たちや担い手が減っており、このままでは継続することが危ぶまれる。観光まちづくりなどを進めながら、担い手を確保していくことが大事である。[2]
- ⑨子育てがしやすい村にすることを明確に打ち出し、子育て世代が入って、出て行かないよう教育支援にもっと踏み込んでいかないと、担い手減少は防げない。[2] [3]
- ⑩明日香村で就農を希望する人は多く、順番待ちの状態であると思われるが、家を借りても農地が借りられない、またその逆の状況も多々あるため、暮らしやすくすることが必要である。[2]

8) 歴史的風土と調和した生活環境基盤の整備に関すること

- ①木柱が多いことで光ケーブルの敷設が進まず、村民生活に支障があるだけでなく、Wi-Fi フリーの環境がないことで外国人旅行客からの評判が悪くリピーターにつながらないため、山間部であっても景観に配慮する形で情報基盤整備を是非進めてほしい。[3]